



お天道様



川崎ゆきお

「寒いのに散歩ですか」

「日に当たらないとね」

「日向ぼっこを兼ねた運動ですねえ」

「寒いといって部屋に籠もってばかりいると、お天道様に申し訳ない」

「それはそれは」

「妙かね？」

「滅多に聞きません」

「そうか、昔の人は、よく言ってたよ」

「何でしょうねえ、それって」

「昔の農家の話かもしれんなあ。日がもう上っているのに、まだ寝ていると、いけないんだ」

「はい」

「それだけじゃなく、天が見ているんだ。行いはお天道様が見ておられる。だから、悪いことは出来ない。それをやると天罰が当たる」

「時代劇にでも出てきそうですねえ。お天道様って、太陽ですか」

「天だよ。空かな。まあ、太陽が一番影響力が強い。日がなければ暗い。夜だよ。しかし夜でも天は見ている」

「なるほど」

「私も、ぶらぶらしていると、お天道様に申し訳ない。といって特に成すべき事もない。日が出る前に野良仕事をやるわけじゃないしね」

「それで散歩ですか」

「それもあるが、日に当たる方が健康によろしい。夏場はそうもいってられんが、冬場は日が恋しい。暖かいしな」

「はい」

「それ以前に、外に出て空を見たい。曇っておっても雨でも雪でも天は天だ」

「では日向ぼっこだけが目的ではないと」

「気持ちの問題だろうねえ」

「いいですねえ。そんな呑気な生活」

「他にやることがないのでな。そんなことを思いながら過ごしておるんだよ」

「ところで会長」

「ん」

「会社が大変なことになってます」

「私は知らん」

「会長が蒔いたタネですよ。責任追及されますよ」

「身代わり観音はどうした」

「猪瀬専務だけではすみません」

「そこで止まるだろう」

「今回は無理です。今、社長が危ないです。次は会長です」

「天罰が当たったのかもしれないなあ」

「会長が辞任されることで、事は終わります」

「そうか」

「呑気に散歩など出ている場合じゃないのです」

「お天道様に背を向ける裏稼業だったからなあ」

「辞任されれば普通のお天道様を見られるようになると思いますが」

「うむ。考えておこう」

了